人はみな歌い、踊る Vol.24

楽器作りの小さな町から

横井雅子

弦楽器作りの工房の様子が再現された音楽・ウィンタースポーツ博物館の一角

photo：横井雅子

横井 雅子（よこい・まさこ）

音楽研究家。国立音楽大学准教授。

音楽そのものを調べるだけでなく、

音楽と人びとがどう関わって生きているのかに興味があります。

その向き合い方の違いに驚かされたり、感じ入ったり。

こんなのどかなクリンゲンタールの山間に楽器工房が点在する

クリンゲンタールという名のドイツの小さな町をご存知だろうか。

ウィンタースポーツ・ファンならスキーの国際大会が開催される地として記憶しているかもしれない。よいジャンプ台があるとかで、日本の選手も試合で訪れているようだ。

一般にはウィンタースポーツで少しは知られているクリンゲンタールは、楽器作りの町という別の顔ももっている。かくいう私は実はこの町のことを全く知らず、大学でたまたまおしゃべりをしていた中で、ドイツの楽器作りについて詳しい先生からうかがって、今年のヨーロッパでの調査の中に含めることにしたのだった。

ザクセン州フォークトランド地方にあるクリンゲンタールは、シューマンの生まれ故郷のツヴィッカウから南にディーゼル機関車で一時間半ほど行ったところにある、チェコと国境を接している町だ。この町には、ヴァイオリンなどの弦楽器のほか、世界的に知られるアコーディオンのヴェルトマイスターを作るハルモナ社など、アコーディオンやハーモニカといった金属のリードを使う楽器を作っている大小の工房がいくつもあるのだという。ウィンタースポーツと楽器作りを町の二つの〝売り〟にしているらしいことは、駅前や町の中心部に立てられた案内板からも察せられる。楽器工房の名前や写真を掲げた囲み広告と、スキー学校、ジャンプ台、ロッジなどの広告が競い合うように並んでいる。

谷あいに沿って細長く延びる町をかなり上っていったところにある工房を訪ねた。道の両側の小高い丘には可愛らしい山小屋が点在している、そんな環境の中の工房だ。ここでもっぱら作られているのはバンドネオン。「バンドネオンはもはや作られておらず、タンゴ奏者は古いバンドネオンを直しながら使う」と言われたりするが、レオポルド・フェデリコが愛用するバンドネオンはクリンゲンタールにあるマイネル&ヘロルド社のものとされるし、他にもバンドネオンを作る工房があると聞いていたので、気になっていたからだ。

そのうちの一つ、ウーヴェ・ハルテンハウアー氏の工房は、古さと新しさを備えあわせた興味深いところだ。現在四七歳のウーヴェさんは、ハルモナ社に一三年勤めて主としてアコーディオンのチューニングを担当して独立。当初は修理を手がけていたが、今から一〇年前に自分の工房を設立した。一〇年という年月はクリンゲンタールでは新しい方に入るのだろうが、工房のある建物は百年以上前に建てられ、ウーヴェさんとは直接つながりのない楽器製作の工房がかつてあったのだという。彼がこの建物を手に入れたとき、ここにはリード・オルガンをはじめとして、大小さまざまなアコーディオン、バンドネオン、コンサーティーナーといった楽器が残されていたほか、昔の上質なバンドネオンを彩ってきた蝶貝の装飾の細かなパーツも発見されたそうだ。クリンゲンタールで作られてきたこれら多種多様な歴史的な蛇腹楽器たちが工房の一角に陳列される一方、蝶貝のパーツは彼の作る楽器の伝統的な装飾で活用されている。ウーヴェさんはバンドネオンの代名詞ともされるアルフレッド・アーノルド社の復刻版を主に手がけながら、世界各地から送られてくる古いバンドネオンやアコーディオンなどの修理でも忙しそうだが、工房には地元の楽器製作学校で学ぶ若者たちも研修にきており、活気が感じられる。

アーノルドのバンドネオンが作られていたカールスフェルトも同じフォークトランド地方にあるが、この一帯はドイツが東西に分裂していた時代には東ドイツに属し、企業の国営化が進む中で安価な普及版の楽器製造が推進されて衰退したということらしい。しかし、体制転換を経てかつての伝統を取り戻そうという機運が高まって、ウーヴェさんのような職人がこの地域らしい楽器作りに取り組むようになった。EUが拡大したことでチェコもその一員となり、リードなどがチェコから容易に取り寄せられるようになったが、そもそもこの一帯の楽器作りの伝統は歴史的には西ボヘミアまでつながっていたのだから、むしろ昔の姿に戻りつつある、というのが正しいのかもしれない。

旅の終わりに、クリンゲンタールの駅近くにある「音楽・ウィンタースポーツ博物館」に立ち寄った。観光案内所の二階にあり、名称からしてこじんまりしたコレクションを予想していたのだが、質・量ともにかなりのもので、この一帯の楽器作りの歴史を俯瞰するのに十二分の内容であった。楽器や写真、ドキュメントのほか、古い工房の様子が再現されていたり、楽器作りの手順がヴィデオで紹介されていたりと盛り沢山で、ひとつひとつをじっくり見ているうちに帰りの機関車の時間をうっかり忘れてしまいそうになった。隣接するツヴォータやマルクノイキルヘンといった気になる楽器製作の場所がまだまだある。今度はいつ来られるだろうか、と早くも先のことを考えながら帰路についたのだった。

クリンゲンタールの楽器製作の歴史を証言する楽器たち

バンドネオンのリードを調整するウーヴェ・ハルテンハウアー氏

工房の棚には修理の済んだアコーディオンが並ぶ